

日本語学習者の聞き手としての行動を評価する —相づちと頷きの不自然さに着目して—

半沢 千絵美
横浜国立大学

要 旨

本研究では、聞き手としての行動である相づちと頷きに着目し、日本語学習者の相づちと頷きの使用・不使用が日本語母語話者にどのように評価されているのかを分析した。

評価の材料として用いたのは 14 組の母語話者と学習者による自由会話 (8 分) と物語伝達 (1-2 分) を録画したものである。これらの会話の参加者とは異なる母語話者 3 名が評価者として調査に参加した。評価者には 28 本の動画を視聴してもらい、1) 学習者が母語話者の話を聞く際に産出した相づちまたは頷きに不自然さを感じるものがあるか、2) 相づちまたは頷きがないことに不自然さを感じる箇所があるか判定を依頼した。

その結果、計 1286 の相づちと頷きのうち 74 が 3 名中 2 名以上に不自然であると指摘されたほか、相づちまたは頷きの欠如に関するコメントも 5 か所について得られた。評価者が不自然だと感じた相づちと頷きは、「英語の使用」「丁寧さに欠ける相づちの使用」「談話の流れに合わない相づちまたは頷きの使用」に分類が可能となった。

1. はじめに

会話において聞き手の役割とは話し手の発話を「聞く」だけではない。相づちを打ったり頷いたりすることで相手の発話を促したり、感情を表明したり、さらには確認や質問をするといった聞き手としての行動が期待されている。それらの行動が欠如していると、話し手に「話を聞いていない」「話題に興味がない」「不快に感じている」などの印象を与えかねない。

話し手の発話に対して聞き手が何らかの反応を示すという現象は日本語だけに限ったものではないが、相づちは日本語会話に特徴的な言語行動であることが知られている。英語や中国語に比べて高頻度で現れる（メイナード 1993、Clancy 他 1996）ほか、表現形式が多様で（大浜 2006）、出現位置にも英語や中国語と違いがみられる（Clancy 他 1996）ことを考えると、学習者が状況に合った相づちを適切なタイミングで打つことは容易ではないだろう。

しかし、どの相づちをどのようなタイミングで使用するかは母語話者間にも個人差があり、学習者の指標となる基準を体系的に提示することは困難である。さらに、学習者の相づち使用に対して不自然さや違和感を感じたとしても、コミュニケーションの問題が生じない限りはそれを母語話者が指摘することは少ないのではないだろうか。したがって、学習者は自らが発している相づちが母語話者に不自然さを感じさせていることを知る機会がないまま日本語学習を進めている可能性がある。

非言語行動である頷きも相づちの一種であるとみなされる（メイナード 1993）場合が多い。頷きは単に応答の身振りとして機能するだけでなく、相づち同様話し手の発話を促したり、同意や共感といった感情を示すことが可能であり、重要な聞き手のコミュニケーション手段である。しかし、これまで頷きは相づち研究の対象にはほとんどなっていない。

本研究では学習者の相づちに非言語行動である頷きを加え、これらが母語話者によってどのように評価されているのかを調査する。ここで言う「評価」というのは学習者の日本語能力を何らかの尺度で測定するという意味ではなく、母語話者が学習者の日本語運用をどう感じたかを印象や感想を含めて測る（小林 2000）という意味である。

本研究において相づちとは話し手（会話の主導権を握っていると考えられる人物）の発話に対して発せられた聞き手（話し手ではない人物）によ

る短い発話を指し、繰り返し、言い換え、文完成（大浜 2006）は分析の対象とはしない。また、頷きは言語表現を伴わない頷きのみを指す。

2. 先行研究

小林（2000）は日本語母語話者が日本語学習者に接した際、どのような点に注目しどのような評価を下すかを知ることを「日本人評価研究」とし、その結果をシラバス設計や教室活動に還元できると述べている。

評価研究には主に質問紙による評価（崔 2013、渡部 2003）とインタビューによる評価（小池 1998、原田 1998）があるが、同じ手法で評価したとしても、評価者が「だれ」であるかによって結果の解釈が異なる。

実際に学習者と会話をした母語話者が学習者の日本語を評価することの利点は、学習者の日本語運用について母語話者が直接感じたことを導き出せるという点である。しかし、評価には個人差があることから、特定の言語行動が一般的にどう評価されるかを分析することはできない。その点、第三者による評価では録音・録画資料を用いて複数名が同一資料を評価することができ、一般的な評価を知る手がかりにできる。

相づちと頷きに着目して評価研究を行ったものには会話の参加者による評価を行った川名（1986）と第三者による評価を行った Miyazaki（2005）がある。ただし、どちらも母語話者データを用いて相づちと頷きの頻度が聞き手の印象とどのように関連するかを分析したものであり、個々の相づち使用を評価しているものではない。川名（1986）は相づちと頷きの頻度が高いことが感情的・社会的魅力の高評価につながったと報告しているが、Miyazaki（2005）は過度な相づちと頷きは評価者に好印象を与えなかったと述べている。

個々の相づちに着目した研究には石田（2005）がある。石田は相づち「ええ」の解釈を母語話者グループと学習者グループで比較した。その結果、母語話者グループは「ええ」を「聞いている」ことを示す相づちであ

ると認識していたのに対し、学習者グループは「同意」を表していると認識していたことがわかった。この違いは、学習者がどのように相づちの選択をするかを考える上で興味深い。

相づちとして使用される表現はその多くが「はい」「うん」「そうですか」など初級文法項目を学習し終えた学習者にとっては難しいものではない。しかし、重要なのは談話の中で聞き手がそれらを適切に産出できるかということである。

評価研究としてではないが、相づちの出現位置の適切さを分析したものに陳 (2001) がある。陳 (2001) は「聞き手が話し手の話の断片しか受け入れていない場合」と「聞き手が話し手の話を理解するために必要となるひとまとまりの情報を受け入れ、理解した上」という二つの状況に分けて相づちの公式を提示し、前者の状況では「はい系」の相づちが、後者の状況では「そう系」と「その他系（「そう系」と「はい系」以外）」の相づちが出現するとしている。この公式が日本語の相づちの特徴を正しく捉えているのであれば、公式から外れる場合は不自然な相づち使用であると認識される可能性がある。

本研究の目的は、母語話者が不自然だと感じる学習者の相づちと頷きの傾向を明らかにすることである。日本語学習者（以下「学習者」）が聞き手として産出する相づちと頷きが日本語母語話者（以下「母語話者」）によって不自然だと評価されるケースにはどのようなものがあるか、その傾向を分析する。

3. 調査概要

3.1 視聴材料

聞き手行動を評価する視聴材料として使用したのは 14 組の母語話者と学習者の自由会話（8 分）と物語伝達（1～2 分）のビデオ録画である。合計 14 組のペアを構成している母語話者 14 名と学習者 14 名はいずれも初

対面同士である。データ収集は 14 組中 10 組は日本で、4 組はアメリカで行われたが、どちらの場合も海外経験が調査参加者に与える影響を考慮して、海外滞在期間を限定して調査への参加を依頼した。

表 1 調査協力者の基本情報

	性別	母語	年齢 所属	英語／日本語 学習年数	備考
母語話者 n=14	女性	日本語	18 歳～21 歳 (平均 19.7 歳) 大学生 n=14	英語学習 6～12 年 (平均 8.1 年)	-4 名はデータ収集時に米国留学中 (渡米 3 週間未満) -どの母語話者も日本語教育経験はない
学習者 n=14	女性	英語	19 歳～28 歳 (平均 21.4 歳) 大学生 n=10 大学院生 n=4	日本語学習 2 年～9 年 (平均 4.2 年)	-全員アメリカの大学または大学院に在籍 -10 名はデータ収集時に日本で夏期集中講座を受講中 (渡日 2 週間未満)

学習者の日本語能力については在籍する日本語クラスのレベルから中級レベルであると判定した。学習者の Simple Performance Oriented Test (小林 2005) の結果から、1 名の点数だけが低いほうの外れ値として認められたが、本研究にはレベル別の分析や量的分析は含まれていないので、全員のデータを視聴材料として使用することとした。

参加者にはまず「お互いを知るために自由に話してください」という指示を出し、10 分間自由に話してもらった。その会話の冒頭 2 分を除く 8 分を「自由会話」とした。続いて、旅行中の体験談を相手に伝えるタスクを実施、母語話者が学習者に自身の体験談を伝えているものを「物語伝達」とした。学習者の日常の言語行動により近い状況を作り出すには自由会話データが最適であると考えられるが、自由会話では話し手と聞き手の役割交代が頻繁に起こるため、学習者の聞き手行動を観察しにくい可能性がある。そこで、学習者の聞き手行動に注目するために物語伝達の録画資料も

視聴材料として準備した。自由会話と物語伝達は全て録画・録音され、全ての発話と聞き手の頷きが文字化された。

相づちには「はい」「うん」「そうですか」「なるほど」「へえ」などの短い発話のほか、「すごい」や「大変でしたね」など相手の発話内容へのコメントも含めた。これはコメントも話し手の発話に対する聞き手の反応であるという点、そして話し手の発話途中または直後に産出されるという点で他の相づちと特徴を共有しているからである。頷きは Maynard (1989) の定義を参考にして「頭の縦の動きで、最低1回は頭を下方に動かし、すぐにそれを元の位置に戻す動き（筆者訳）」と定義した。相づちと頷きが共起している場合は、頷きに言語表現が伴っているため頷きではなく相づちに分類した。合計14組分の自由会話と物語伝達の動画ファイルの他、会話を文字化した資料を視聴材料として準備した。

3.2 評価者と評価手順

上記の視聴材料を評価者として視聴したのは3名の母語話者である。本研究の目的はより一般的な評価を探ることにあるため、会話参加者ではなく、第三者による評価を実施した。表2は評価者3名の基本情報をまとめたものである。

表2 評価者の基本情報

	性別	年齢 所属	外国語学習歴	海外滞在経験	外国人との 接触
評価者1	女性	22歳 大学4年	英語：10年 フランス語：1年	なし	不定期にあり
評価者2	女性	22歳 大学4年	英語：10年 韓国語：2年	幼少期にドイツ 在住（7.5年）	ほとんどなし
評価者3	女性	23歳 大学4年	英語：12年 スペイン語：2年	なし	なし

評価者 3 名のうち 2 名が日本語教育を、1 名が日本語学を専攻していたが、どの評価者にも日本語教授経験はなかったため、外国人の日本語に対しては一般的な日本人の感覚を持っていると判断した。

評価の手順は以下の通りである。3 名の評価者には自由会話と物語伝達の 14 本ずつの動画ファイルと文字化資料を渡し、「左側に座っている外国人日本語学習者の聞き手としての行動に注目しながらビデオ見ること」と、ビデオを見ながら「1: 学習者の相づちまたは頷きが日本人のものとは違うと直感的に感じた際にスクリプトから相づちと頷きを探し、丸で囲んだ上、そう感じた理由を書く。2: 日本人だったらここで相づちか頷きを入れると感じた場合もく（挿入マーク）を書き入れる。」という指示を与えた。理由については自由に書いて構わないと指示をしたが、考える手がかりとなるように選択肢として以下の五つを準備した。

- a. タイミングはいいが、日本人は普通使わない相づちを使っている。
→あなたなら何を使いますか。
- b. 日本人は普通このタイミングでは相づちや頷きを使わないと思う。
→どこで使えばよかったですか。
- c. この相づちは丁寧ではないと思う。
- d. 他の理由
- e. 理由はよく分からないが、なんとなく。

その他の指示として必ず一人でビデオを視聴し他の人に相談しないこと、また、14 本の自由会話と物語伝達の動画を連続して視聴するのではなく、4 日間以上で全てを視聴するように指示した。これは他者と相談することによって直感的判断ができなくなること、そして、ビデオの視聴を連続して行うことによる判断力の低下を避けるためである。

4. 分析結果

4.1 結果概要

視聴材料である自由会話と物語伝達の長さはそれぞれ合計 112 分と 25 分 59 秒となった。その中で確認された相づちは 811、頷きは 475 となり、合計 1286 の相づちと頷きが分析対象となった。

評価者 3 名のうち 1 名からでも何らかの指摘があった箇所は合計で 379 になったが、母語話者の評価には個人差があると考え、2 名または 3 名から同じ箇所について指摘を受けた場合のみ分析対象とした。その結果、1286 の相づちと頷きのうち 74 が分析対象となった。また、相づちまたは頷きの欠如については 5 か所についてコメントが得られた。

表 3 は評価者に不自然であると評価された相づちと頷きの使用・不使用の傾向をまとめたものである。評価者から指摘を受けた箇所は以下の手順により分類をした。まず、相づちまたは頷きの欠如についてのコメントは全て「1. 相づちまたは頷きの欠如」とした。次に、聞き手が日本語会話には現れない英語の表現を使用しているものは「2. 英語の使用」とした。残りの指摘は相づちまたは頷きの選択が談話の流れとは合っていないケースであるが、その中でも相づちが丁寧ではないと評価された場合は「3. 丁寧さに欠ける相づちの使用」と分類した。以上三つの分類に当てはまらないものは「4. 談話の流れに合わない相づちまたは頷きの使用」としたが、使われている相づちや出現位置によってさらに六つに分類した。

表3 評価者が不自然だと指摘した学習者の相づち・頷きの分類

		2名 によ って 指摘	3名 によ って 指摘	
1. 相づちまたは 頷きの欠如	1-1. 意味的なまとまりで相づちも頷きも使わ れていない。	2	1	
	1-2. 相づちまたは頷きが使われていない時間 が長いと感じられる。	2	0	
2. 英語の使用	日本語の相づちではなく英語の表現で反応を 示している。	7	1	
3. 丁寧さに欠け る相づちの使用	会話全体の丁寧さを考慮すると、相づちが丁 寧ではない（丁寧さのみが問題）。	13	1	
4. 談話の流れに 合わない相づ ちまたは頷き の使用	4-1. 「そう 系」の相づ ちに関する 指摘	4-1-1. 「そう系」の相づちの終 助詞の使い方が適切ではない。	5	5
		4-1-2. 発話の継続時に「そうで すか」など「そう系」の相づち を使用している。	2	3
		4-1-3. その他「そう系」の相づ ちが談話の流れに合っていない。	2	3
	4-2. 「わかる系」の相づちの使用が談話の流 れに合っていない。	5	0	
	4-3. 意味的なまとまりで継続を促す相づちま たは頷きを使用している。	7	2	
	4-4. 話し手の発話に対して感情の表出がみら れない。	1	2	
	4-5. 聞き手のコメント（形容詞）の選択また は時制が適切ではない。	8	0	
	4-6. その他談話の流れに合わない相づちを使 用している。	6	1	
合計		60	19	

4.2 相づちまたは頷きの欠如

相づちまたは頷きがなかったことに対して指摘があったものを「相づち
または頷きの欠如」と分類した。これは評価者の「○○のあとに何かあっ
たほうがいい」や「頷いたほうがいい」などのコメントをもとにした。

相づちまたは頷きの欠如を大きく二つに分けると、意味的なまとまりで相づちも頷きもなかったケース (1-1) と、一定の間相づちも頷きもなかったため指摘を受けたケース (1-2) があった。ここで意味的なまとまりとは陳 (2001) の「聞き手が話し手の話を理解するために必要となるひとまとまりの情報」を指す。次の例 1 は意味的なまとまりで相づちも頷きもなかったケースの例である。以下、例中の NS は母語話者の発話を、NNS は学習者の発話を表す。¹

(例 1 : 1-1) 物語伝達 10 : 母語話者が大雪時にバスの中で待機しなければいけない経験を学習者に伝えている場面

NS : で、2月で大雪が降ってきて、
NNS : H H
NS : バスの中に15時間いたんです。
NNS : HHHHHHH
NS : で、その後にえっと、お墓参りに行ったんですけど、お墓の近くに海があるんですね。

学習者は母語話者の説明を聞きながら、頷きで反応を示しているが、「15 時間いたんです」という意味的なまとまりの直後では何も反応を示していない。これに対して 3 名の評価者全員が「です」のあとに何か相づちを入れたほうがいとコメントしている。意味的なまとまり、特にこの例のように相手に共感や驚きの反応を期待しているのであろう箇所では相づちを打つことが望ましいということが示唆された。以下は一定の間相づちも頷きもないことが評価者に指摘された例である。

(例 2 : 1-2) 物語伝達 4 : 母語話者が旅行中道に迷った経験を学習者に説明している場面

NS : 自由行動になったんで、その、行ったんですね、
NNS : H HH
NS : いろんなその学校で計画を立てて、じゃあことここについて言って、行ったんですよ。で、そしたらあの歩いてたんですけど私がナビゲーションで、あのう、地図持って行ったんです。
NNS : H はい

NS: けど、道に迷うんですよ。[笑い]

母語話者が自身の経験を説明している「いろんな」から「ナビゲーションで」までの約 14 秒間、学習者はただ母語話者を見つめるだけであった。この部分は 2 名の評価者によって相づちまたは頷きが少ないと指摘された。日本語では高頻度で現れると言われるターン途中の相づち (大浜 2006) が一切ないまま母語話者が話を続けていることに評価者が不自然さを感じたと推測できる。

4.3 英語の使用

日本語の相づちで反応するべきところ、英語の表現を用いて反応をしていたため、評価者から不自然であると指摘を受けた箇所は合計 8 か所あった。具体的には‘Oh My Gosh’と‘OK’が 1 件ずつのほか、‘oh’で驚きや理解を表しているケースが 5 件、「うん」ではなく‘umm’という返答であったため指摘を受けたケースが 1 件あった。

4.4 丁寧さに欠ける相づちの使用

評価者が学習者の相づちを不自然だと感じた理由は丁寧さの問題に由来するものも少なくなかった。「4. 談話の流れに合わない相づちまたは頷きの使用」に分類された 52 か所の中には丁寧さの問題が重複して起こっていると考えられるものが 11 あったが、丁寧さのみに問題があると思われるケースをここに分類した。丁寧ではないと指摘を受けた 14 の相づちのうち 13 は同一の学習者が使用した「うん」についての指摘で、残り 1 件は他の学習者による「あそう」の使用についてであった。

4.5 談話の流れに合わない相づちまたは頷きの使用

4.5.1 「そう系」の相づちに関する指摘

談話の流れに合わない相づちまたは頷きの使用の中で最も多くの指摘があったのは「そう系」の相づちに関するものであった。「そう系」の相づちとは「そうですか」「そうですね」などそ系の指示語を含む相づちを指す。以下は「そう系」の相づちに伴う終助詞の選択が指摘された例である。

(例 3 : 4-1-1) 自由会話 3 : 学習者にどんなアニメが好きか質問されて母語話者が答えている場面

NS : トトロとか[笑い]H
NNS : ああ トトロ[笑い]
NS : ジブリが好きです。
NNS : HH ああHそうですね

「ジブリが好きです」という母語話者の回答に対して学習者は「ああそうですね」と頷きを伴う相づちを打っているが、評価者3名全員が「そうですか」のほうが適切であると指摘している。これは母語話者の回答が学習者にとっては新情報であり、ここで同意を示す「そうですね」という相づちを用いることは不自然に聞こえるからだと思われる。

二つ目は話し手の発話の継続時に産出される「そう系」の相づちについてである。前述の陳(2001)の公式によると、「聞き手が話し手の話の断片しか受け入れていない場合」は「そう系」の相づちを用いることは不可能であるとされているが、学習者の相づちにはその公式に当てはまらないものがみられた。

(例 4 : 4-1-2) 自由会話 13 : 母語話者が学習者にこたつが何か知っているか質問した後、こたつの描写をしている場面

NS : 冬は、でも、こたつってわかりますか?
NNS : こたつ、ああ、あのテーブルの、
NS : そう、テーブルに、布団みたなのをかぶせて、
NNS : はい HH そうですね

NS : あれが最高ですよ。
 NNS : あそうです

母語話者がこたつを描写している際、学習者は「かぶせて」のあとに「そうですね」と相づちを打っている。3人の評価者はここでは「はい」または「はいはい」を使用したほうがよかったとコメントをしている。これはまだ母語話者の発話が明らかに継続していると思われる時に「そうですね」という意味的なまとまりで用いられる相づちが打たれたことで、相手の話を止めようとしているように感じられたからではないだろうか。

その他、「そう系」の相づちが談話の流れに合わないケースとして分類されたのは「そう系」の相づちを用いて相手の発話を肯定することが不自然な場合である。

(例 5 : 4-1-3) 自由会話 8 : 学習者が「小学校 4 年生」という単語を理解していないと感じ、わかるかどうか母語話者が確認している場面

NS : 小学校4年生ってわかりますか?
 NNS : ええと、もう一度?
 NS : 小学校 4 年生。
 NNS : はい、そうそう
 NS : elementary school student
 NNS : うんうんうんうん

学習者に「ええと、もう一度?」と依頼されたため、母語話者が「小学校 4 年生」という単語を繰り返したところ、学習者が「そうそう」と反応した場面である。この「そうそう」について評価者全員が「はい」または「ああはい」を用いて返答すべきだと指摘している。これは学習者が母語話者に繰り返しを依頼したのにもかかわらず、「私は前から（その言葉の意味を）知っていましたよ」と言っているような印象を与えることになり、結果として談話の流れに矛盾が生じてしまっているからだと考えられる。母語話者が「elementary school student」と英語で言葉の説明をしていることから、二人の応答がかみ合っていないことがうかがえる。「そうそう」

を用いたことで、丁寧さの欠如も問題になると考えられるが、代替案をみると丁寧さよりも「そう系」の相づちの使用に問題があることがわかる。

4.5.2 「わかる系」の相づちに関する指摘

以下は「わかる系」の相づちに関する評価の一例である。

(例 6 : 4-2) 物語伝達 11 : 母語話者が学習者に旅行中に食べたドラゴンフルーツの味を描写している場面

NS : 甘いけれど、薄い味なんですね。
NNS : 薄い?薄いは?
NS : 味が薄いついていう感じで、
NNS : ああ そうですねはいはい
NS : 不思議な味がしました。
NNS : わかりました

母語話者の「不思議な味がしました」という発話の直後に、学習者は「わかりました」と言って反応している。この「わかりました」に対して1名の評価者は「そうなんですね」が、もう1名は「へえ」または「そうなんですね」が適切ではないかと提案している。

学習者は「薄い」という単語の意味が分からず、母語話者に聞き返し、回答を求めている。もし「わかりました」が「薄い」という語彙の説明の直後であった場合は「理解しました」という意図だと捉えられ、不自然ではなかったかもしれないが、「不思議な味がしました」という味の描写に対する反応としては自然ではないことが示唆された。

4.5.3 意味的なまとまりで継続の相づちまたは頷きを使用している

陳 (2001) の公式に従うと「はい系」の相づちは意味的なまとまりの直後では使われないはずであるが、学習者の相づちの出現位置は必ずしもその通りではなかった。以下の例は「あはい」の使用が評価者によって指摘を受けた例である。

(例 7 : 4-3) 自由会話 12 : 学習者が織物 (weaving) の授業をとっていることがわかり、母語話者がその授業に自分の友人がいると伝えている場面

NS : わたしの日本人の友達が今、
 NNS : HH
 NS : weavingのクラスをとってます
 NNS : あはい

母語話者は自分の日本人の友人も同じ授業をとっている事実を「わたしの」から「とってます」という発話で共有した。その際、学習者は途中で2回頷き、「とってます」と同時に「あはい」と相づちを打っている。この「あはい」に対して3名の評価者はいずれも「そうですか」または「ああそうですか」のほうが適しているとコメントした。

「あはい」という相づちで相手の発話内容を理解したことを示すことはできるが、この場合は母語話者の新情報に驚きや興味を表す「そうですか」や「ああそうですか」のほうが談話の流れに合っているというのが評価者の判断だと思われる。

以下の例 8 は頷きの使用が不自然だと評価された唯一の例である。

(例 8 : 4-3) 物語伝達 4 : 母語話者が道に迷ったときの経験を学習者に伝えている場面

NS : 目的地たどりつかなくて、
 NNS : HH
 NS : 3回ぐらい同じところをまわったりして。
 NNS : H
 NS : で、朝から晩まで3回も4回も迷っちゃったんで。
 NNS : [笑い]

母語話者の道に迷った時の状況説明に対して学習者は頷きと笑いのみで反応している。これに対して2名の評価者が「まわったりして」のあとの頷きに違和感を感じたと報告している。1名の評価者が「ええそうなんですか」を代替案として提案していたことから、意味的なまとまりで頷きだ

けで反応するのは相手の発話内容に対して興味や共感を表すのに十分ではない可能性があることが示された。

4.5.4 感情の表出の欠如

ここには相づちが打たれているにもかかわらず、感情の表出が十分ではないと思われるケースを分類した。

(例 9 : 4-4) 物語伝達 2 : 母語話者が旅行中のホテルで経験した怖い体験を学習者に伝えている場面

NS : 幽霊とかあのう出ないようにするためのお札が、
部屋に貼ってあったんですよ。

NNS : _____ ああそうですか [笑い]

ここでは母語話者の発話に対して打たれた相づち「ああそうですか」が不自然だと 2 名の評価者から指摘されている。評価者から代替案の提示がなかったため、談話の流れからの推測であるが、母語話者が自分の恐怖体験を新情報として伝えているにもかかわらず、驚きの様子がみられなかったことに評価者が反応したのではないだろうか。意味的なまとまりで「そう系」の相づちが用いられているという点では陳 (2001) の公式にも当てはまり、相づちのパターンとしては可能ではあるが、驚いたり同情したりといったもう一步踏み込んだ感情表現があるとより自然な談話の流れとなったのかもしれない。

4.5.5 聞き手のコメントに関する指摘

聞き手が自分の感情を表出するためには「いいですね」「すごいですね」「怖いですね」など形容詞を用いてコメントをする場合がある。その形容詞の選択について違和感がある、または形容詞の時制が不自然であると指摘されたケースが全部で 8 件あった。

4.5.6 その他談話の流れに合わない相づち

評価者に指摘された談話の流れに合わない相づちの使用のうち、一定のパターンが認められなかったものをその他として分類した。

5. まとめと考察

本研究は評価者が3名のみと少数のため量的な分析はできないが、評価データから母語話者が不自然さを感じる学習者の相づちと頷きの使用・不使用の傾向を大きく四つに分類することができた。これまでの研究では学習者の相づちの頻度が注目されることが多かったが、実際に学習者の聞き手行動を母語話者に評価してもらったところ、相づちと頷きの欠如よりも談話の流れに合った相づちまたは頷きが使用されていないことへの指摘が多かった。しかし、欠如しているものは評価の対象とはなりにくい可能性もあるため、頻度の問題に着目して評価者の意見を求めるのであれば調査方法を再考する必要がある。

本研究の結果が明らかにしたのは、学習者にとって習得が難しい可能性のある相づちと頷きの使用である。特に「相づちと頷きの出現位置」と「聞き手の態度の表明」については評価者から指摘を受けたケースが多くみられた。まず、「聞き手が話し手の話の断片しか受け入れていない場合」と「聞き手が話し手の話を理解するために必要となるひとまとまりの情報を受け入れ、理解した上」（陳 2001）というのは相づちの出現箇所を大きく二つに分けたものであるが、学習者の相づちと頷きにはこれらの出現位置に適さないものがみられた（表3の1-1、4-1-2、4-3）。話し手の発話の途中で「そうですね」など発話の意味的なまとまりに現れる相づちを使用したり、話し手の発話の意味的なまとまりで「はい」など発話の途中で現れる相づちや頷きを使用することは、「会話を早く終わらせたい」「話題に興味がない」などの印象を与えかねない。出現位置を考慮して相

づちと頷きを指導するのであれば、物語伝達など、ある程度長さのある談話を設定して練習をするのが効果的ではないだろうか。

次に聞き手の態度の表明とは表 3 の 1-1、4-3、4-4、4-5 に関連するものである。学習者の相づちまたは頷きに母語話者の期待する驚きや共感の感情がみられない場合、母語話者によっては学習者が自分の話を聞いていない、興味を持っていないと感じる可能性があり、コミュニケーションの問題にも発展しかねない。学習者には感情を表す相づちが少ないという結果 (Mukai 1999) もあることから、適切な箇所では相手の話に理解を示す、共感する、驚くなどの興味や感情を表す相づちが使えるよう指導していく必要がある。それは、相づちとして用いる形容詞の選択についても言えることで、文脈に応じた形容詞が使えるよう指導や練習をしていかなければいけない。

今後は評価者数を増やし、母語話者が感じる不自然さの程度について量的分析をすることも可能であるが、そのためには研究方法の改善が必要である。本研究では合計 28 本の動画を評価者に視聴してもらったが、視聴と評価にかかる時間を考えると、量的分析が可能となる評価者数を集めるのは難しい。効率的にデータを集めるには本研究の結果から分類が可能となった問題点を厳選した上で視聴材料を作成すべきである。

また、本研究では聞き手の相づちや頷きを不自然に感じた理由について、あらかじめ五つの選択肢を準備し、評価者はそれらの理由から選択することも自由に理由を記述することも可能であったが、例を提示したことで評価者が自由に考える機会を奪っていた可能性もある。理由をあらかじめ設定すべきかどうか、するのであればどのような選択肢を設けるか再検討が必要である。さらに、相づちの代替案に関しても今回は可能な限り提示してもらったが、必須とすることで評価者が感じた不自然さは何に由来するのかを明確にできるかもしれない。

今回は第三者による評価方法を用いて学習者の聞き手行動を評価しているが、第三者による評価は必ずしも会話に参加していた当事者が感じたことと一致するとは限らない。例えば、例6の会話では学習者の発した「わかりました」の不自然さが指摘されたが、これは第三者が客観的に談話の流れを観察したために見えてきた不自然さかもしれない。会話に参加していた母語話者には自身が説明した「薄い」に対する反応の遅延として、「わかりました」が違和感なく受け入れられていた可能性もあるからである。会話に参加していた当事者が相手の聞き手反応をその瞬間に実際にどう評価していたかを正確に把握することは難しいが、第三者評価とはずれがあるかもしれないことは留意しておくべきである。

相づちや頷きに対する母語話者の評価を知ることによって学習者の不自然な相づちと頷き使用の実態を探ることができるだけでなく、学習者の行動が母語話者に与えるプラスやマイナスの印象がどのように形成されるのかを知る手がかりにもなる。今後は会話の参加者が感じた印象の分析や学習者へのインタビューも組み合わせることで学習者の聞き手としての行動の不自然さの問題を解明していきたい。

注

- * 本稿は CAJLE2015 Proceedings の原稿を改稿したものである。有益なご指摘とコメントを下された2名の匿名査読者の方々にお礼を申し上げます。
1. 文字化記号は以下を使用した。
 - 。 発話の終わり
 - 、 継続している発話
 - ? 上昇イントネーション
 - H 頷き (1回) /HH 頷き (2回連続) /ああ H 相づち「ああ」と頷きの共起

参考文献

- 石田浩二 (2005) 「ニュージーランド人日本語学習者の相づち『ええ』
についての知識-母語話者と学習者の解釈の比較-」 『日本語教育』
127, 1-10
- 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する
研究』 溪水社
- 川名好裕 (1986) 「対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼ
す効果」 『実験社会心理学研究』 26, 1, 67-76
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教
師と一般日本人のずれ-初級学習者の到達度試験のロールプレイに対
する評価-」 『北海道大学留学生センター紀要』 2, 139-156
- 小林典子 (2005) 「言語テスト SPOT について-用紙形式から Web 形式へ
-」 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 20, 67-82
- 小林ミナ (2000) 「『何を』教えるかの再吟味へ-日本人評価研究の意義
と限界-」 『北海道大学留学生センター紀要』 4, 149-159
- 崔文姫 (2013) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価-日
本語教師と非日本語教師の因果モデルを中心に-」 『国立国語研究所
論集』 5, 1-26
- 陳姿菁 (2001) 「日本語の談話におけるあいづちの種類とその仕組み」
『日本語教育』 108, 24-33
- 原田明子 (1998) 「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価す
るか」 『北海道大学留学生センター紀要』 2, 157-168
- メイナード泉子・K (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- 渡部倫子 (2003) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価-
評価尺度開発の試み-」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』 2, 52,
175-183

- Clancy, Patricia M., Thompson, Sandra A., Suzuki, Ryoko, & Tao, Hongyin. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26, 355-387.
- Maynard, Senko K. (1989). *Japanese Conversation: Self-contextualization through Structure and Interactional Management*. New York: Ablex Publishing.
- Miyazaki, Sachie. (2005). *Japanese Women's Listening Behavior in Face-to-face Conversation: The Use of Reactive Tokens and Nods*. Ph.D. dissertation, Michigan State University.
- Mukai, Chiaki. (1999). The use of back-channels by advanced learners of Japanese: Its qualitative and quantitative aspects. *Japanese Language Education around the Globe* 9, 197-219.